

マイゴのフタコアイシャ

黒き怪球

バリヤルドの策謀

Bad end if

前編



「この世界には大きな穴が開いている――」

その穴は異次元へと通じていてある日突然何処にでも現れるらしい。

そして不運にもその穴に落ちてしまった者は痕跡すら残さず世界から消滅し、その現象は神隠し等と呼ばれる。

穴は本当に存在するのか？、我々はこの世界の摩訶不思議を調査し――。

「これ、ほんとらしいよ?。」

「ん?、どういうことです?。」

「この世界に穴が開いてるって話。」

アイシャ宅、

3人で晩御飯を食べながらレントが見たがっていたテレビ番組を見ているとアイシャがそんな事を呟く。

「なんで先輩がそんなこと知ってるんです?。」

「この前リムンち行った時にお隣さんと挨拶してね、そのおじいちゃんマーゴが教えてくれた。」

「先輩、くわしく。」

その手の話が大好きなレントの目の色が変わる。

「ん、なんだっけ、マーゴがこの世界に来た時に開けた空間の穴で、
今も空きっぱなしで月の横らへんに見えてたって言うってたなあ。」

「見えてた？、って事は無くなったんですか？」

「それなら私でも聞いたことがありますよ、
昔は見たみたいなニユアンスの話でしたよね。」

「ルミアさん、どこで聞いたんです!？」

「どこかは忘れましたが、
色んな所行くとたまにそんな話が出るんですよ。」

「リイムに聞いたら何か分かるかな？」

「いや、見えないって、今では見える者はごくわずかとか言ってた。」

「先輩、わたしそのおじいちゃんに会いたい。」

「私も興味があります。」

「いいよ、じゃあ次の任務終わったら3人で行こうか。」

「やった!、何聞か考えとこ〜つと。」

「何聞くの?。」

「そうですね、穴が空きっぱなしなのは大丈夫なのか?とか
色んな次元に通じてるならそこから何かやつてくる事は
あるのか?とかですかね。」

「マーゴだけでも一杯一杯なのにこれ以上何か来るのは
やだなあ。」

「そうですねえ。」

「いやいや、いいものが来るかもしれないじゃないですか。」



その日のアイシャの任務は、別の地域のマールゴハンタールの援護の予定だった。

その地域はクラス3のマールゴハンタール5人のチームが2つで地域を守っていて、比較的マールゴの出現率も低い所だったのだが、そこで上級マールゴらしきものが目撃されたという。

人員は十分だが安全性を重視した2チームは一旦任務を中断し、応援を要請したのだが、不運な偶然が重なり中々応じられないマールゴハンターが捕まらず、漸く都合がついたのがアイシャだった。

そしてアイシャは1人で現地へ赴いた。勿論任務を軽視しているわけではない。

上級マールゴは目撃から討伐まで時間との勝負と言われあまり間が空くとマールゴ側が察知し逃げてしまう。

しかも今回アイシャの元に話が来たのは目撃報告から3週間経っており通常それだけ間が開いてしまうと下級マールゴでさえ逃げてしまうだろう。

なのでアイシャは自分の仕事は殆ど無いだろうなと状況を聞いて判断し共を連れずに来たのだった。

だが到着したアイシャを迎えたのは聞いていた話とは違う事態だった。

アイシヤを迎える筈のチリムの担当がおらず、別の者が現れたので理由を聞くと、

5人のマールゴハンターが現在行方不明だという。

それは4日程前の事で、

5人はいつも通りの担当地域を

いつも以上に警戒しつつ深夜警備を行ったのだが、翌日から連絡がつかないというのだ。

2チリムの関係は良好ではあるものの、

深夜という事もあり緊急事態以外での連絡はしなかった為、翌日定時連絡が無い事で事態が発覚した。

それを聞いたアイシヤは行方不明のマールゴハンター達の捜索と救出に任務を切り替える事にじたのだった。

アイシヤ達は当時警備を行っていた洞窟付近へと向かう、その人数は7人。

追加のもう一人はバリヤルドと名乗るクラス3のマーゴハンタリで、数日前に連絡を貰い、師匠の任務が終わる前に先駆けて応援に駆け付けたという。

そういつた連絡を受けていなかったアイシヤだが、話を聞けばどうやら連絡のすれ違いが起こつていたようだった。

しかし状況的に応援はありがたい話だ、なのでアイシヤは偵察も兼ねて同行してもらえないかと頼むと彼女は快諾してくれた。

道中バリヤルドと世間話をしていると自分の事を「ワシ」と呼んだり、最近の事に関して疎かたりと、少し変わつて面白くないとアイシヤは思った。

問題の洞窟はある程度の探索がされており、中に広い空間があるという話だったので、まずはそこから調べようという話になった。

注意しつつ進んでいたのだが、突然地響きが起こり、大きな岩がいくつも落ちてくるといいうアクシデントが起こる。

怪我人は出なかったが、アイシヤは他のマリゴハンター達と分断されてしまう。目の前を塞ぐ岩を砕いて合流する事も考えたが、これが原因で更なる崩落が起こっては目も当てられない、幸い例の空間への経路は塞がってはいないようである。この先は通信は悪くなるが安全に進めると聞いたアイシヤは、そこで合流しようとしてし合わせ、先を急いだ。

そして合流地点に付いたアイシヤだったが、他のマリゴハンター達は現れず、道を間違えたかと心配したが、そこにバリヤルドが1人で現れた。

他のマリゴハンター達とは聞くと、また崩落が起こり、他の者は別のルートで、更に先の場所で合流する事になったという。

この洞窟の構造はあのマールゴハンター達の方が詳しい、
なのでアイシヤはバリヤルドと一緒に先を急ぐ事にした。
その時である、バリヤルドが来た所とは違う穴から
血まみれのマールゴハンターが現れアイシヤの前に倒れた。

彼は先程のチリムの二人で
何事かと思いき寄せるアイシヤ。
息も絶え絶えだが意識があつた彼に
何があつたの？、何にやられた？

と問いたですと、彼は激痛に顔を歪ませながらも
震える腕を上げ、

——アイシヤの後ろを指差した——

次の瞬間、アイシヤの後頭部に何かが高速で
激突するが、バリヤに弾かれる。

バキンッ!という音で弾かれたものは壁面に激突し
岩にめり込む、
それは黒い球のようなものだった。

「いった。」

「そうは見えないけどねえ。」

男性マールゴハンターを庇うように
バリヤルドに相対するアイシヤ。

「どういう事？説明してもらえる？」

「さて…ねっ!!」

何処から取り出した複数の球をバリヤルドが放つ、
高速で放たれた球を躲す事無く受けるアイシヤ、
自分で当てるものはバリアで弾き、男性に向かう物は
拳で弾く。だが弾いた球は空中で静止し、再び向かってくる。

「君っ!、走つて!」

そう言われたマールゴハンターは荒い息を吐きながらも
立ち上がり、ゴクリと頷き走り出す。

「逃がさなぬうつおっ!!」

「させるかよ。」

バリヤルドが球の軌道を彼に向けるが
それを弾いたアイシヤが凄まじいスピードで
バリヤルドに肉迫すると
腹に強烈な一撃を叩きこんだ。

（判断力のある子で良かった。）

状況を察し自分は足手まといになると判断し
アイシヤの三言で迷わず駆け出し
穴の奥へ消えたマリゴハンター、
彼なら無事にここを出て応援を呼んでくれるだろう。

「まずはこつちか。」

先程打ち上げたバリヤルドが地面に落ちる事なく
仰向けのまま空中で静止している。

「あなた、運が悪かったねえ、あいつがいなければ
辛い思いをせずに済んだのに。」

「そうだね、運が悪かったよ、
今回は楽な任務で後はこの名物料理食べて、
お土産買って帰る予定だったのにさ。」

「ハハハ！、マリゴハンターは
その位じゃないとねあああああつ！」

ビクン！と激しく仰け反ったバリヤルドの体から
黒い風船のようなものがいくつも膨れ上が
彼女を完全に包みこみ、体化し大きな球体になる、

そして球体の一部が膨らむと
そこからラバに包まれた人の上半身
が起き上がり、中から尖った角の様な物が幾つも生え、
それが明確な形を形成していくと最後に
黒以外の色が付き異形の姿が完成した。

「ふっ!!」



(ちよつとめんどくさいなコレ……)

バリヤルドから放たれた黒い球を掴み握りつぶすアイシヤ、
アイシヤの周りを飛び交うこの球は様々なタイミングでアイシヤへと
襲い掛かる。

そのスピードは大きめのサイズならば追えるが
小さいものになるとかなりの速度で追いきれないこともある。

しかしはいくらアイシヤへの突撃が成功してもアイシヤのバリアを
貫く事は出来ない、
だからといって無視も出来ない、
何故ならば少し油断すると球はまとまって襲い掛かってくる、
今もアイシヤの顔面に何個も降り注ぎ視界を塞ごうとしてくる、
そしてその後は……



「隙あり!、つかまえ…あら?。」



バリヤルドの胸にある大きな球が襲い掛かってくるのだ。

どうも捕獲に使うものらしいが、そう言われて捕まっつてやるつもりはない、大きな球をひらりと躲し顔面に纏わりつく球を掴み砕く。

（ほんとめんどくさいな、
なんか割る時変なもの放出するし。）

球を砕く瞬間、ヒビ割れの奥から甲高いキーンン！という音がした後に中からエネルギーの様なものが噴き出す。

この球の処理にアイシャは頭を悩ませていた、球は弾性と強度が高く常に宙をフワフワと浮いているため打撃が殆ど通用しない、なのでアイシャは球を掴み握り砕くという手段に出た。

その作戦は成功し、ブニユリとした手ごたえがしてから更に力を込めると球は限界を迎えヒビが入り砕ける、だがその際に球からエネルギーが吹き出すのだ。

（まあ、これ淫気だよ、でもちよつと変な感じするし
今の内に何とかしないと。）

良くも悪くも馴染みのゾワゾワした淫気の間接感だが、何かいつもと違う感じも覚えたアイシャは、それがこのマーゴの能力だと仮定し長期戦は不利と判断する。

「そういうえば、あんたマーゴハンターに扮するって考えたね、立ち振る舞いが真に迫ってたよ、どこで覚えたの?。」

「あら嬉しい、昔取った杵柄という奴よ。」

「ふーん、クラスいくつの人から学んだの?。」
(まず球の数を減らす!。)

戦力であろう球の数を減らすための時間を稼ぎに多分無駄だろうと思ったが、話かけてみるアイシヤだったが、マーゴ、バリヤルドは以外にも話に乗ってきた。

「ワシの頃はクラスなんてなくてね、今は働きアリとか兵隊アリとか言われないうでしよう?。」

「えっ!?!。」

思わず驚きが顔に出てしまう。

「働きアリ」というのはその昔、マーゴハンターの立場が一番酷い時に言われていたマーゴハンターの蔑称で、「兵隊アリ」に関しては脳無しと同義で使われた更に酷い蔑称だったという。

しかし今はそんな呼び方をしてる者はいない、ただその蔑称を知っているという事は……。

「あなた、もしかしてはぐれ?。」

「ん、一度死んで、転生したらマーゴになつてたのよ。」

確かにその時期のマーゴハンターはアダマンティウス・リベラティオから無茶な命令や酷い任務ばかりで押し付けられ、死者数は最も多かつたという、だからはぐれになるのはその時期のマーゴハンターが多いのだが。

「冗談でしょ?。」

「そ、冗談、ふふふ。」

「マーゴハンターを取り込んだとかの方がまだ信じられたのにね?。」

「そんな事出来るわけないでしょ。」

流石に転生は冗談が過ぎるが確かにマーゴがマーゴハンターを取り込んだという話も大分荒唐無稽だ、

しかしマーゴに冗談を正論で返されるとは思わなかった。

「二応聞くけど共存の道はある?。」

「いいえ、全く。」

その返答は簡潔だが憎悪を感じる拒否だった。

「そう、じゃあここで倒すしかないね。」

「んっ!」

アイシヤの回りを漂ういくつかの球が強い光を発した。固い球同士がぶつかったような、コンッ!という乾いた音と共に発光した玉から不可思議なエネルギーの波動が発せられる。その波動がアイシヤに到達した瞬間、アイシヤの背筋に甘い痺れが走り思わず声が出てしまう。

「ワシを倒すのは無理じゃないかしらね。」

コンッ!

コンッ!

「くあっ!」

思わず後ろに下がったアイシヤの後ろに回り込んでいた球から浴びせられた波動に背中を何本もの筆で優しく撫でられるようなゾワゾワとした感覚を与えられる。

（これが、コイツの能力か。）

「時間稼ぎをしているのが貴方だけと思った?。」

「はあっ!...んいつ♡!」

波動を発する球の排除に掴みかかるアイシヤを
ひらりと躲じた球は目前で光を発する、
至近距離で波動をまともに浴びてしまうアイシヤ。

「ワシの淫欲波動は如何かしら?、心地好くてたまらないでしょう?」

「は?、冗談...」
(け、結構キツいな...)

強がつてみたものの、波動がもたらす甘美に
体の奥からジンジンするような痺れが込みあがってくる、
しかもこれはかなり強力な部類だ。

「所であなた、
おっぱい掴もうとしてるけど、もうそういう気分なのかしら?」

「えっ!?、そんな。」

事はない、そう言うつもりだったが。
胸を見ると自分の右手が乳房を掴もうとする距離まで迫っていた。
完全に無意識の行動だった、その驚きから生まれた油断の隙間に
コンッ!という音と共に波動が入り込む。

「はきゅうつつんっ♡♡!!」。



「あら、可愛らしいこと。」

うずくまるアイシヤにクスクスと嗤うバリヤルド。

手を胸から遠ざけようとした瞬間を狙った波動により
反射で自分の胸を軽く掴んだ瞬間、胸から全身に凄まじい快感の雷撃が広がった。
体が痺れに襲われ膝から力が抜けアイシヤはその場に膝をついてしまう。

「ん、ふー、ふー。」

荒い息を吐き、足を膝をぴったりと閉じ震える姿は普段の勇ましさととは
違う無力な娘のような仕草だった。

「あなたはワシの力を削いだつもりだったようだけど、
淫欲波動は蓄積していくものなの。」

それを何度も握りつぶしたあなたの手はもう極上の快樂装置
になっっているの。
ふふふ、ちよつと動かすだけでゾクツとするでしょう?。」

びくん!

「んうあつ♡!、ん…くう…。」

手を胸から外そうと少し動かしただけで襲い掛かるビリっとした刺激に
声が漏れてしまい羞恥に頬を染めるアイシヤ。

（これ…強力すぎる…くそ。）



（やつぱりね…誰がするかっ!）

右手で胸に触れたのは完全に無意識だった、おそろくはバリヤルドが言ったようにこの蓄積した波動の影響で手が勝手に動かされてしまったのだろう。

だからこそ体に快感で膝から力が抜け崩れると悟った瞬間、アイシヤは足を閉じ左手を体から離れた。

少々情けない体勢ではあるがこの手のマリーゴが次に狙うのは大体股間である、しかし足を広げなければその後の対応もしやすい。

「ほら、体が切ないでしょ？お腹とかさすってみたら落ち着くわよ。」

（まあそういうことだよね。）

また無意識に動かされてたまるかと左手にギュツと力を含める、おそろくこの左手も右手と同じ様に快楽発生装置に変えられている、そんな手で胴体に触れようものなら何が起こるか容易に想像できるし、そんな企みに乗ってやる気はさらさら無い。

ビク！
バクン！



「くっ……う。」

（ホントに厄介だなこれ……）

波動を浴びせられる度に体の奥から湧き上がる熱が増す。快感を処する術は心得ているが何時までも耐えられるものではない、すぐにでも対処しなければならぬ。これまでの攻撃で間合いを図られ、波動を発する球は絶妙にアイシヤの間合いから外れており、より対処じづらい状況に陥っていた。

「あなた相当我慢強いね、ワシの時もそういうヤツが一杯いたけど、じゃあ……」

余程波動の力に自信があったのか、アイシヤが思い通りにならない事に焦れたのか、バリヤルドは4つの球で1つの球を囲み波動を集中させる、吸収した球は他よりも怪しい輝きが増し、それはアイシヤの眼前に移動すると……

（何する気……？……？……？……？……？……？……）





「そうよ、その光を見つめて…、
そうすると、心がフワフワしてとろっても気持ちよくなってしまうの。」

握っていた左手がだらんと下がり、ぴったり閉じていた足に隙間が出来
強張っていたアイシヤの四肢から力が抜けていく。

「右手で乳首を転がしてみても、凄く気持ちいいから。」

「ふぁあっ♡♡♡♡♡ はぁぁ♡♡♡♡♡」

虚ろな目で揺らめく球の光を見つめるアイシヤは
言われるがままに右手の指で乳首に触れクニクニと転がす、
敏感な突起を快楽発生装置に替えられた手で自ら弄る事で生まれた
甘美な電流にアイシヤはほんの数秒まで出来ていた
堪える術を忘れたかのように甘く切ない喘ぎが漏らし、
舌を切なそうにうねらせる。

「あなたの意識はワシのネグロスファイアに捕らわれた、
さあ、左手でお〇んこを好きに弄りなさい…。」

「ああん♡♡♡♡♡ ふぁぁぁあっ♡♡♡♡♡ んぁ♡♡♡♡♡ はぁぁぁぁぁ」

ビクビクと震えながら乳首への自慰行為に耽る
アイシヤの左手が少し持ち上がるがその場でプルプル震え動かない。

「抵抗するのね、いいわ、ちゃんとトドメを刺してあげましょう。」

「スファイアでおのんこを支配してあげる、
これで子宮をノックし続けられてもあなたは耐えられるかしら?。」



「ふあうっ♡♡♡!」

アイシヤの秘部に潜り込もうとする球が股間に触る衝撃にアイシヤが叫ぶ

「ふふふ…ん?」

秘部に潜り込めたと思ったバリヤルドだが球が激しいスパークを起こして弾かれる。よく見ればアイシヤの股間にはエネルギIIの膜の様なものが張られており、球はそれに弾かれたようだった。

「まあっ、悪あがきを、いいわよ、それが駄目になるまで何度でも…。」

「…されてええっ!!、 たまるかああああっつっ!!!!」

「はあ……はあ……はあ……」

（なんとか……なつた……けど、今の、何だったの？）

バリヤルドだった黒い破片が無数に散らばる中で
荒い息を吐くアイシヤ。

同期の中でも最も早くクラス5になったアイシヤ、
強大な力に晒された経験も多く時には敗北する事もあるが、

強大な力というのとは強大であると感ずる事が出来る。

あたりまえの話のようだがそれが自然な事で

例えば強力な催眠系能力は取り込まれるという
感覚の後に意思等を無力化されていくという
過程が必ず存在する。

しかしあのマーゴの球の光を見た瞬間、

そんな物すら感ずることなく意識を完全に攫われていた。

抗えないというよりは抗い方が分からないという感覚だった。
股間で球を弾いた時に起こったスパイクで偶然意識を取り戻せたが
あれが無ければと思うと背筋に寒いものが走る。

そして意識を取り戻した直後の事だ、

あの力は存在してはいけないもの、
排除しなければならぬ。

という強烈な衝動に突き動かされた、
そんな経験は初めての事だった。

その後は全身から膨大なエネルギーを放出して漂う球の殆どを粉碎、
怯んだバリヤルドに対して全力の二撃を叩きこんだ。

辛うじて討伐できたものの全力のエネルギーの放出で
暫くアーマウェポンは使えない、後先考えてる余裕のない中

一応少しはエネルギーを残せたのでバリヤは使えるが
暫く戦闘は難しいだろう。

「まずはここから出ようかな。」

「一緒に入ったマリゴハンタリ達も気になるが、ここは一旦外に出て応援を呼んでから対応を考えるべきと考えたアイシヤは来た道を戻ろうと歩き出した――」

「まだお帰りには早いわよ。」

「!?、な

ぐうつ!。」

その声が聞こえたその時には目の前を無数の黒い石が高速で飛び交いアイシヤは黒い嵐の渦中にいた。

石は砕いたはずのバリヤルドの破片、無数の破片はアイシヤに激突しながらもまとまり球体を形成していく。

「これは、ぐつ、対処が……!。」

先ほどの比ではない無数の球嵐はバリヤシが使えないアイシヤに四方八方から絶え間なく激突し、まともに対抗できない彼女の体を遂には複数の球で連携し持ち上げてしまう。

「!?、

まずつ!、

ぐうつ!、

あああああつ!。」

足が地を離れ焦るアイシヤを取り込む球は黒い竜巻となつてアイシヤを逃さない、更に球は波動を発し

それはまるでハリケーンの渦で起る稲妻のように光る。

その中にいるにアイシヤは吹き荒れる黒と紫の竜巻に成すすべなく翻弄され続けるのだった。







バリヤルドに嘲笑われても今のアイシャにはどうする事も出来ない。
黒球の激流に飲まれたアイシャはろくな抵抗も出来ず
無数の波動で弱らされ手足を大きな球に拘束される。

くっ……手足のこれ直接波動が……力、抜けちゃう……。

手足を引き延ばされた状態で力が入り辛いものもあるが、
この大きな球は波動を直接体に注入するらしく、
抵抗しようと力を込めてもすぐに霧散じ、
だんだん力自体が込め辛くなっていた。

「分かるかしら？ さっきまであなたのやつてきたことは全部無駄、
ただ淫欲波動を体に溜め込んだだけなのよ。」

「んあんっ♡♡!」

アイシャの目の前で破片が集まり球が再生する、
瞬間波動が發せられアイシャの体が快感で炙られる。

バリヤルドも体の半分が崩れた状態だが問題ない様子で、
おそろくどれかの球が本体でそれ以外は壊しても再生してしまう
のだろう。どちらにしてもこの状況で出来る事は先の「マゴハント」が
応援を連れてくるまで耐える事だけだと腹を括るアイシャが

「あら、抵抗しないの？ いや、これは耐えて時間稼ぎね、
応援でも待つつもりかしら？」

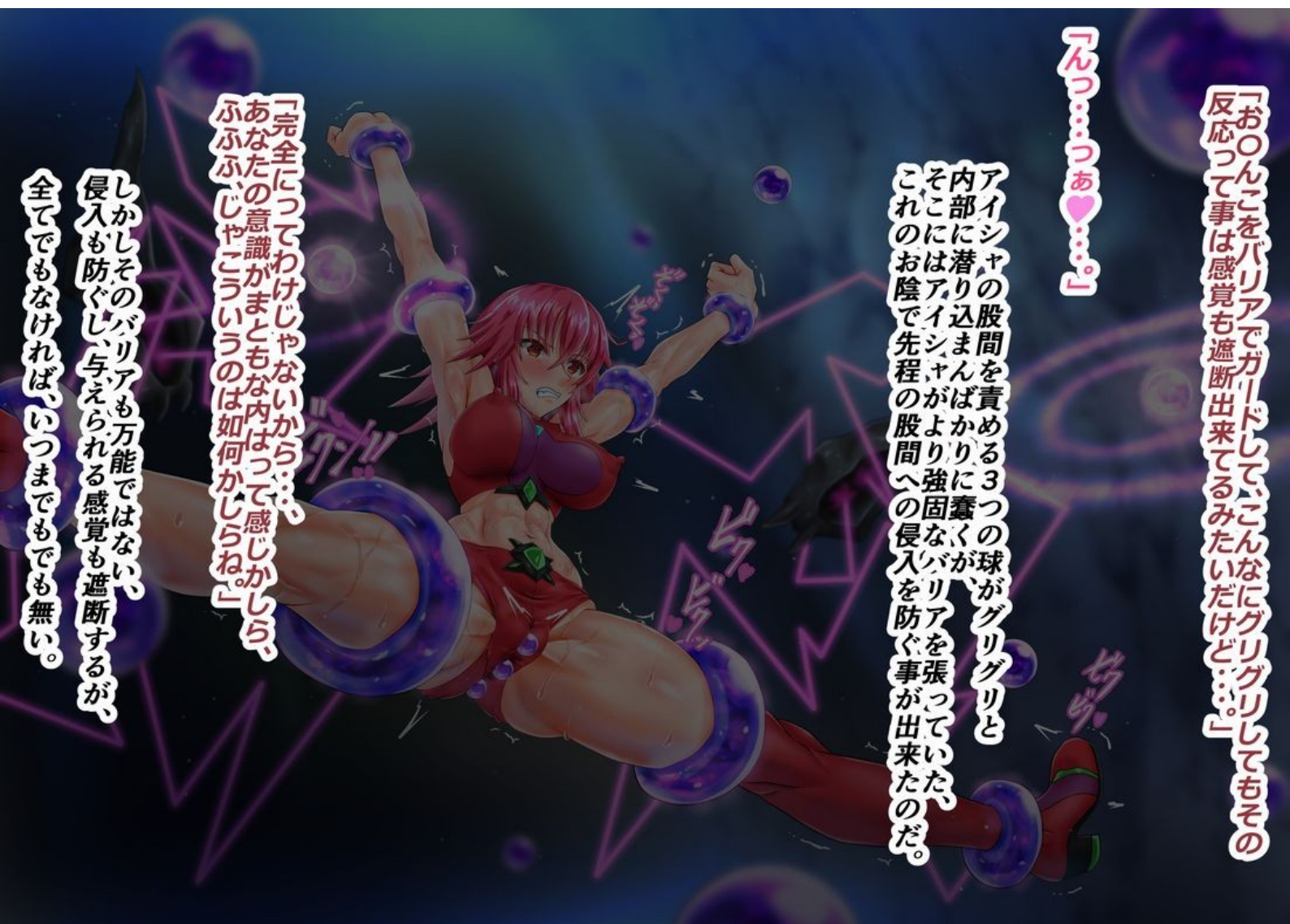
「おのんこをバリアでガードして、こんなにグリグリしてもその
反応って事は感覚も遮断出来るみたいだけども……」

「んっ……っあ……♡……」

アイシヤの股間を責める3つの球がグリグリと
内部に潜り込まんばかりに蠢くが、
そこにはアイシヤがより強固なバリアを張っていた。
これのお陰で先程の股間への侵入を防ぐ事が出来たのだ。

「完全につてわけじゃないから……、
あなたの意識がまともな内はつて感じかしら、
ふふふ、じゃこういうのは如何かしらね」

しかしそのバリアも万能ではない、
侵入も防ぐじ、与えられる感覚も遮断するが、
全てでもなければ、いつまでもでも無い。





「これはワシの得意技よ、今のあなたには効くかしら?。」

「ま、さか……」

「グッ!!」

「オッ!!」

「グッ!!」

この淫欲波動というものは異質すぎる、

上級マーゴと幾度も戦ってきたアイシャだからこそ分かる、

これはあまりにもマーゴのそれとは違いすぎる、
耐えるという行為自体が格下と言わんばかりの力で
マーゴハンターの存在そのものを押さえつけるような
圧倒的な何かを感じてしまう。

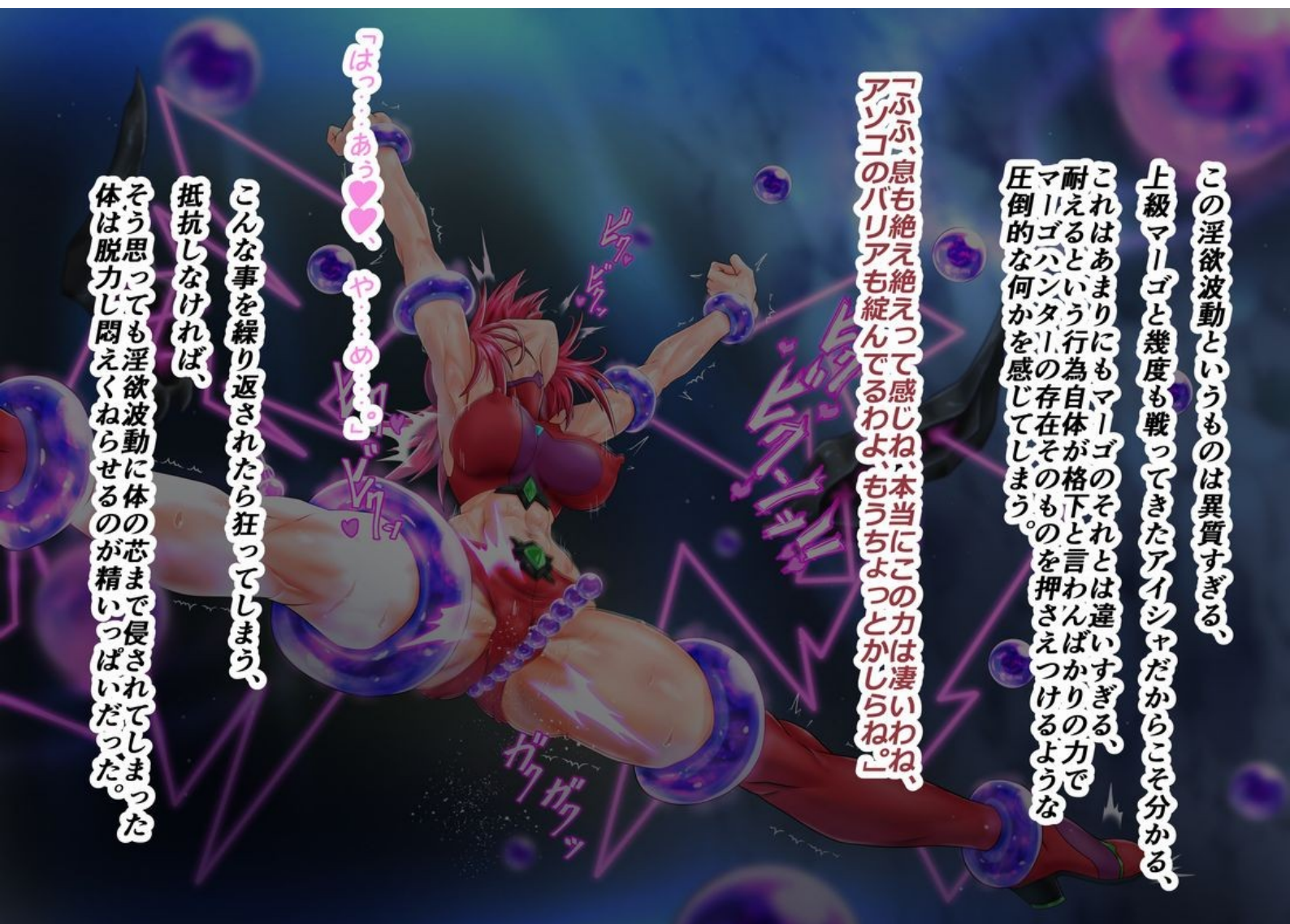
「ふふ、息も絶え絶えって感じね、本当にこの力は凄いわね、
アツコのバリアも綻んでるわよ、もうちよつとかじらね。」

「はっ……あう♡♡♡ や……め……。」

こんな事を繰り返されたら狂ってしまう、

抵抗しなければ、

そう思っても淫欲波動に体の芯まで侵されてしまった
体は脱力し悶えくねらせるのが精いっぱいだった。





しかし球は必死に舌を動かして取り外そうとしても
びつたりとくつき離れそうにない。
極大の快楽に痺れる舌は
先が勝手に窄まり迎え入れようとすが、
アイシヤの最後の理性がそれを辛うじて留める。



「とっても…ふふふ
シフフフフフフ。」

To be continued